

長崎県考古学会大会を聴講しました！

12月11日（日）に今年度の長崎県考古学会大会が大村市コミュニティセンターで開催されました。コロナ禍のため対面での開催は3年ぶりでした。参加者は40名ほどで、皆さん熱心に聴講されていました。



パネルディスカッションの様子

大会のテーマは「長崎県における弥生時代の鉄器生産」で、本土部での鉄器の出土が少ない本県では画期的なテーマ設定でした。事務局のファインプレーですね。

まず「弥生時代の鉄器研究の現状」という演題で長崎県教育庁学芸文化課の山梨千晶氏による基調講演が行われました。ご本人は「緊張してます。」なんて仰っていましたが、鉄器研究のこれまでの学史を整理しつつ、研究の現状や課題をコンパクトに説明され、鉄器不勉強の私には大変分かりやすい内容でした。ありがとうございました。



続いて壱岐市教育委員会の松見裕二氏がカラカミ遺跡を中心に壱岐の鍛冶関連遺跡の報告をされました。カラカミ遺跡で発見された国内唯一の地上式周堤付炉や日本の鋤にあたる朝鮮半島の鉄製タビの

演台に立つ左から山梨氏、松見氏、柴田先生

出土など、当時の渡来人の壱岐での活動を彷彿とさせる遺構、遺物の紹介は大変興味深いものでした。またカラカミ遺跡では丹塗土器に用いられたベンガラを作るための焼成炉が発見されていますが、同遺跡では鉄素材やベンガラを交易品として島外に流通させていたことが分かってきており、原の辻遺跡とは異なるカラカミ遺跡の特性が徐々に明らかにされ、壱岐研究の進展が

感じられました。

続いて岡山大学文明動態学研究所の柴田亮先生が発表された大村市帯取（おびとり）遺跡は本県本土部で初の鍛冶工房が発見されたことで注目が集まり、今大会のテーマ設定に大きく関わった遺跡でもあります。鉄研究の第



パネラーの皆さん



中尾氏

一人者である村上恭通先生の指導の下に調査されており、貴重な成果が多く得られました。そのうえで柴田先生は大村市教委在籍時の調査担当者として調査経過を詳細に公表するだけでなく、調査の途中では自らミスと評された一部手順も率直に披歴されました。今後の鍛冶遺構調査に少しでも貢献したいと発表に臨まれていたことがよく分かり、自らの調査経験をネガティブな部分まで公表することはなかなかできるものではないので、先生の姿勢を大いに称賛したいと思いました。

以上が3人のご発表で、ここからは後半のパネルディスカッションの様態を記述します。ただ、発表内容は筆者のメモによるもので、発表者の閲読は受けておりませんので内容に誤りがあった場合はすべて筆者の責任であることをお断りしておきます。

先の発表者3人のパネラーに加えて、コーディネータとして長崎県学芸文化課の中尾篤志氏が参加し、進行を担当されました。

まず中尾氏が山梨氏と一緒に弥生時代の鉄器についておさらいをされました。鉄は中国の春秋戦国時代に普及し、特に燕の鑄造鉄斧が朝鮮半島と日本に伝わったこと。当時の鉄素材は中国から伝わったものであったこと。加工の特徴は鉄素材の先端部を研いで使っていること。磨製石器を作るように鉄の破片の先を砥石で研いで利器に用いていること。弥生前期末から中期は火を使わないで鉄器を製造していること。鍛冶遺構が出現するのは弥生中期後半からで、すぐに西日本に伝播したこと。弥生前期末から中期初頭は鑄造品で、中期末から鍛造品が増えること。などが整理されました。

続いて松見氏と中尾氏が吉岐の鉄を検討されました。

松見氏は原の辻遺跡では鉄器が中期中葉に出現しているが、製品が多いことが特徴で、製品に手を加えることはなかったとし、この点が鉄素材の先端

を尖らせるなど加工して付加価値をつけたうえで鉄素材を流通させていたカラカミ遺跡との違いであると両遺跡の違いを説明されました。従来、カラカミ遺跡は原の辻遺跡の衛星のような立ち位置でしたが、研究の深化により見直されているようですね。

中尾氏は吉岐の特徴は鉄斧、ヤリガンナが鉄器化すると同時に農具まで含めて鉄器化しているところがすばらしいとされ、特に当時朝鮮半島で普及していたタビの出土はすごいと感嘆されました。松見氏がタビは日本国内では完形の出土例が無く、カラカミの渡来人が用いた地上式周堤付炉も同様に、渡来人が使い慣れたものを用いていたようだと思われました。

ここで話題が鉄鎌に移り、鉄鎌に甲乙2種類の区別があることに触れたうえで、松見氏は原の辻遺跡の場合は半々で、最新の2019年の集成でも同様の結果であったことを指摘されました。

次に地上式周堤付炉の構造に話が及び、松見氏はカラカミ遺跡の場合、屋外炉なので当然風が当たるため、火のまわりに15%か20%の高さの壁を作って風邪を集めていたとみられると説明されました。

そのうえでカラカミ遺跡の炉の周りに簡易柱穴などないので、テントみたいな仮設の覆い屋を想定していると補足されました。

次に中尾氏が鍛冶炉は集落の縁辺や端にある場合が多いが、カラカミ遺跡の配置はどうかと尋ねられると、松見氏は同遺跡が山の中にあり、鉄の盗難防止、隠れ家的な作業、水を嫌う、炭を使うことによる薪の確保などが考えられるとし、対馬の三根遺跡も同様に、鍛冶炉については未報告だが、同じ立地傾向を示していると対馬の状況にも触れられながら回答されました。

次に鍛冶の道具に話題が移り、松見氏がカラカミ遺跡の鉄素材製造のための道具の状況は、100点ほどの敲石が出土しているが、大から小までサイズをそろえていること。道具は台石や砥石で北部九州の石器と同じで、炉が他に例を見ないだけで、弥生時代の通常の鍛冶行為、すなわち村上分類のⅣ類の炉で行われていた作業を行っていたと説明されました。

次に県本土部の状況について話題が移り、柴田先生は大村などで弥生後期に鉄器が普及することは間違いなく、後期でも後ろになればなるほど増えているとされました。

さらに大村市富の原遺跡出土の鉄戈に話が及び、山梨氏が鍛造品であるため、国内では奴国（福岡県春日市周辺）が製造拠点であったことや技術的には鍛接が必要であると述べられ、朝鮮半島製の鉄戈は小型で、日本国内の物は中・大型品が多い傾向を述べつつ、奴国との関係で大村に持ち込まれたと思われる指摘されました。

この後、中尾氏が鉄戈の分布について、青銅器の分布の外側の地域に配布されている傾向があると指摘されていると補足されました。

このあと再度、帯取遺跡に話題が移り、柴田先生から帯取遺跡の鍛冶は鍛延や鍛接はできていない。小型品中心で、道具は石器メイン、有機物も使う段階で、釣針以外は自前でできたのではないかと説明されました。

次に帯取遺跡の鉄素材はどこから持ち込まれたかという問題で、中尾氏が候補地のひとつが佐賀県唐津市の中原（なかばる）遺跡であることを言われ、大会に参加されていた唐津市教委の立谷（たちや）聡明氏にコメントを求められました。立谷氏は中原遺跡の概要に触れられたのちに帯取遺跡を含めた肥前西部、島原半島、肥後に中原遺跡から鉄素材が供給された可能性がある」と指摘されました。

続いて鍛冶工房の調査方法の留意点や認定方法について話が及び、柴田先生は禰宜田氏が設定された5項目（①敲石、磨石②台石③不定形の焼けた粘土塊④製品として機能を特定できない鉄製品⑤木炭片：筆者註）が大事であること、しかし竪穴住居検出時には、以上の5項目は分からないので、竪穴建物の大きさ、位置関係、炭化物の3項目が重要となると強調されました。さらに微細な鉄片をつかまえるためにはフルイは必須であること、金属探知機も有効であると話をされました。この点はカラカミ遺跡でも同様のようで、中尾氏が怪しい所は土をとるのが基本のようだ。弥生後期以降の竪穴建物跡の調査では鍛冶遺構の可能性を考えつつ調査する必要があるとまとめられました。

パネラーによる討議はここまでで、次は会場の参加者から質疑を受けました。

参加者のお一人から、青銅器について触れていないとの質問があり、山梨氏が青銅製の斧など例がないわけではないが、日本の道具は石器から鉄器へ変換しており、日常の利器として青銅器は使わなかったと言える。と回答されました。

続いて会長の稲富氏が富の原遺跡の有樋鉄戈の微細加工は鋳造ではできないのではないかと問題提起されると、山梨氏が有樋鉄戈については諸説あるが、富の原遺跡のそれは鍛造品との結論であること。鑿（たがね）切りでできること。しかし福岡県の門田（もんでん）遺跡の薄い鉄戈は鋳造品という説が根強く、当時の日本では作れないので朝鮮半島製と言われている。と回答されました。

最後に本日参加された福岡県糸島市の岡部裕俊氏が大会の感想を述べられた後、閉会となりました。

今大会のパネルディスカッションは筆者にとって大変勉強になった有意義な時間でした。あらためて事務局やスタッフの方々にお礼申し上げます。どうもありがとうございました。なお末筆ながら本稿の掲載を快諾いただいた寺田副会長に感謝申し上げます。（令和4年12月13日 脱稿 同14日一部修正）



閉会挨拶をされる寺田正剛副会長